

平成 2 7 年 6 月 2 2 日現在

機関番号：3 4 5 3 5

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：2 5 7 5 0 0 1 3

研究課題名（和文）保育所等における送迎時のインフォーマルな子育て支援の実態調査

研究課題名（英文）Cooperation with guardians in a day-care center offering child-nurturing support

研究代表者

松尾 寛子（Matsuo, Hiroko）

神戸常盤大学・教育学部・講師

研究者番号：6 0 4 4 1 3 9 1

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000 円

研究成果の概要（和文）： 保育士と保護者が直接会って話することができる機会でもある送迎時に着目し、H県内の乳児を預かる認可民間保育所に対するアンケート調査を実施した。送迎保育ステーション事業を実施しているA市に聞き取り調査を実施した。

アンケート調査によると通常保育時間帯であっても、玄関ホール付近や門の辺りで子どもを受け渡しする保育所が10%以上あった。送迎保育ステーション事業については、待機児童の解消や保護者の送迎の負担など、保護者のニーズについては大きく貢献しているが、課題があることがわかった。専門職としての子育て支援における保育士の役割を確立していかなければならない。

研究成果の概要（英文）： A questionnaire survey on the time taken for children, was conducted among licensed private nursery schools that care for infants in H Prefecture. I did the interview investigation to A city, which operates a nursery school station business.

According to the survey results, more than 10% of nursery schools hand over from guardians children at around the schools' entrance hall or gate during normal school hours. Additionally, the interview revealed that there were issues even though it helps greatly in meeting the needs of parents by eliminating children on waiting lists for nursery schools, reducing the burden for parents that have to shuttle their children, etc.

研究分野：教育学、保育学

キーワード：子育て支援 送迎時のコミュニケーション 保護者支援 送迎保育ステーション事業

1. 研究開始当初の背景

本研究は、姫路市内の認可保育所（民間）に限定してアンケートを実施してきたその継続的研究として、兵庫県内の乳児を預かる認可民間保育施設長にアンケートを配布し、保育現場では保護者対応が、保育士にとってどの程度負担になっているかということ、子どもの受け渡し場所がどのようになっているのか、その理由も含めて明らかにすることを目的とした。保護者とインフォーマルな関わりにより、保護者と保育者が連携できているということを保育所自身が感じ取ることができれば、保育の質向上が図られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

保育所の役割・機能の多様化にともない、各自治体や各保育所において様々な子育て支援が実施されている。

子どもを保育するには、保育所での子どもの姿だけではなく、帰宅後の子どもの姿を想像して保育を行うこと、帰宅後から翌朝登園するまでの姿を想像しながら保育をすることにより、今の子どもの姿が理解できるといえる。子どもの 24 時間を考え保育するためには、保護者と保育者あるいは保育所側との連携を図ることができなければならない。

保育を行う際は、保護者と保育者の双方向でコミュニケーションを必要とし、保育所と保護者が一人の子どもを「共に育てる」という意識を持つ必要がある。

連携方法には様々あるが、本研究では、保育士と保護者が直接会って話すことができる機会でもある送迎時に着目し、誰が子どもを受け取り・お返ししているのか、その人に行っている理由について兵庫県内の乳児を預かる認可民間保育所に対するアンケート調査を実施した。さらに千葉県 A 市の送迎保育ステーション事業に対する聞き取り調査を行った。実施した内容については以下のとおりである。

保育施設のフォーマルな子育て支援を明らかにする

保護者対応の状況を明らかにする

子どもを受け渡しする保育士の実態を明らかにする

そこから見えてくる保育士の業務の負担感を明らかにする

の 4 点である

3. 研究の方法

保育施設のフォーマルな子育て支援については、各自治体に届けられている子育て支援の実態を調査した。

保護者対応の状況を明らかにする、子どもを受け渡しする保育士の実態を明らかにする、については、質問紙調査を行った。

送迎保育ステーションにおける送迎の実態も明らかにする、送迎保育ステーション事業を実施している A 市に聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

まず先行研究を概観した。保護者対応についての研究や、保護者の保育ニーズについての研究については以下の通りである。

住田・山瀬・片桐（2012）の研究より、保育所に子どもを預ける保護者は出勤時間までの間に子どもを保育所に送るということで、保護者の利便性を重視しているということがわかった。

成田（2012）の研究より、若い保育士ほど保護者とのコミュニケーションに自信がなく、保護者対応に困っているのではないかとということが読み取れた。

奈良（2011）の研究より、保育者にとっては毎日の連絡帳記入は人数が多くなればなるほど負担になることと、保育者の文章力のあるなしに大きく影響されるため、負担に感じる場合もある。しかし、保護者との連携のために必要なものであるということには変わりなく、保護者にとっても子どもの成長の

記録として大事なものであるということが読み取れた。

これらの先行研究より、保護者との連携が必要だということはわかった。連絡帳などを利用することも連携の一つであるということとはわかった。しかし、登園降園時の保護者とのコミュニケーションについて特化した研究はいまだ無いため、新しい見地ということができ、研究を進めていくこととなった。

倫理的配慮については、神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学研究倫理審査委員会にて承認された。

次に第一に子育て家庭におけるサポートの定義付けを行った。

子育て家庭におけるサポートについては様々な方法が考えられるが、保育所等に申し込みをして可能になる面談等については、保護者も保育所側も面談日時だけではなく、面談を受ける人・場所ともに、あらたまった形となるため、本研究では「フォーマルな子育て支援」と位置付けることとし、保育所等で行われる子育て支援のための事業を「フォーマルなサポート」とした。

一方で、日時を指定して保護者から相談を受けることも保育所における子育て支援の一つであるが、保護者にとっては保育者と送迎時の短時間に行うコミュニケーションを通して、子育ての悩みを解消できたり、増幅を抑えたりできることもあると考える。保育者にとっては保護者の少しの変化を読み取り、声をかけるきっかけづくりになることもあるため、本研究では送迎時など普段の保護者と保育者とが行う子どものことについての会話や、それ以外の会話について「インフォーマルな子育て支援」とし、金銭の授受がなくとも子どもを預けることができる祖父母や近隣等の存在などを「インフォーマルなサポート」と定義づけることとした。

次にアンケート結果を分析した。

(1) 早朝保育時間・延長保育時間

アンケート調査によると早朝保育時間帯も延長保育時間帯も子どもの送迎場所は8割以上は保育室内、保育室前ということがわかった。保護者と保育者が子どもの育ちを共に喜び合える関係作りのために、保育所としてあるいは保育士として保護者とのコミュニケーションの重要性を認識し、短時間の間に内容の詰まった会話ができるようにするためには、保育士としてコミュニケーション力を高める努力をしなければならない。何より保育所として毎日のコミュニケーション場面を適切に確保していかなければならないのではないかと考える。

(2) 通常保育時間

アンケート結果では、保護者から子どもを受け取る場所として8割以上の保育所が保育室内や保育室前と回答していた。しかし、通常保育時間帯であっても、玄関ホール付近や門の辺りで子どもを受け渡しする保育所もあった。

保護者から子どもを受け取る場所をそこにしている理由を、80%以上の保育所が保護者との連携を図るため、という回答をしているのに対し、保護者へ子どもをお返しする際に「保護者と保育士が話し込むのを避けるため」と回答した保育所は5園あった。

また、早延長時間では担任以外が子どもを受け渡しすることは時間差勤務の関係上ありうることはあるが、通常保育時間内でも受け渡し担当保育士が子どもを保護者から受け取ったり、お返ししたりする現実も見えてきた。これは、保護者との連携をはかるということより、送迎時間の短縮を見越した受け取りではないかということも考えられるのではないだろうか。

朝、保護者から子どもを受け取る場所として、玄関ホール近辺と門の辺りが約14%あり、子どもを保護者へお返しする際には、保育室内、保育室前が80%以上であるのに対し、玄

関ホール付近・門の辺りが約 10%あった。これは担任以外の保育士が受け渡ししているものと考えられ、担任は保育中に保育室を長時間離れることは安全管理上難しいと考えられるため、受け渡し保育士が子どもを保護者にお返しすると思われる。そうすれば、その日一日起こった出来事やトピックスを保護者に伝えることは難しく、保育所は単に子どもを預かる場所、ということにならないのかという疑問が起こった。

受け渡し保育士を決めていることにより、保護者と担任が会話している間の安全管理方法についての問題視しなければならない。保護者と保育者が話し込むことにより、保育室内での事故やけがが起こってしまうほうがより問題である。しかし複数クラスを合同で保育室内で保育をして、担任以外の保育士が保育を行うことにより担任が保護者と話す時間が持てるのではないかと考える。

子育てや保育所での保育は、ドライブスルーでものを販売するような方式では、保護者は保育所を「子どもを預ける場所」と認識してしまわないだろうか。

「連絡方法」として、送迎時に保護者と保育士が直接会話すると回答したのは、208 園（94.5%）であった。残りの 5.5%については、連絡帳に記載したり、連絡ボードに記載したり、バス通園ということも考えられる。特に低年齢・低月齢児を保育する際は、今日起こった出来事を保育者が保護者に対して正確に伝えていく必要があるため、連絡帳に記載するより口頭で伝えたほうがよい出来事などもあり、会話を通して保護者と保育者が連携できる方法はないか考える必要があるのではないだろうか。

（3）送迎保育ステーション事業について

「送迎保育ステーション」というキーワードを入力し、上位に挙がった 2 市について調査を行うため、B 市と A 市について電話で依

頼を行った。

B 市へ依頼を行ったところ、送迎保育ステーションの利用児が少ないということ、現在様々な見直しを行っているところであり、調査の対象にはならないだろうということを担当者が話された。

A 市については、8 月 15 日に A 市役所にて市担当者より話を聞くことができた。

A 市ではある社会福祉法人に送迎保育ステーション事業を委託している。事業費は平成 26 年度は 1 億以上とのことである。

送迎保育ステーション事業実施場所については、在来線 2 線が乗り入れをしている C 駅と D 駅にて実施している。

C 駅で実施されている送迎保育ステーションは平成 19 年 7 月から、D 駅で実施されている送迎保育ステーションは平成 20 年 7 月から実施している。年度当初からの開設ではなく、7 月 1 日から実施というところについて尋ねてみると、担当者はその理由はわからないとのことであった。

C 駅で実施されている送迎保育ステーションは、駅ビル直結であり雨に濡れないアクセスであるのに対し、D 駅で実施されている送迎保育ステーションは駅から 1 分程度歩かなければならないようであるため、利用者は C 駅で実施されている送迎保育ステーションは、平成 25 年度は延べ 39766 名、D 駅で実施されている送迎保育ステーションは延べ 16238 名で、D 駅で実施されている送迎保育ステーションのほうが利用は少ない。

平成 19 年度（C 駅の送迎保育ステーション開設当初）は、C 駅で実施されている送迎保育ステーションは延べ 3136 名だったことをみると、開設当初の 10 倍以上の利用がある。D 駅で実施されている送迎保育ステーションについても開設当初の平成 20 年は延べ 7993 名だったので、開設当初の 2 倍以上の利用がある。

送迎保育ステーションには、バス 1 台につ

き、バス運転手 1 名、保育士有資格者 1 名がいるとのことである。C 駅で実施されている送迎保育ステーションではバスは 5 台、D 駅で実施されている送迎保育ステーションについてはバス 2 台を稼働させている。

通常の保育所利用にあたっては、市が利用可否を決定するが、送迎保育ステーションの利用にあたっては、通常の保育所利用申し込みとは別に、利用申し込みは送迎保育ステーションにて面談形式で行うとのことである。送迎保育ステーション利用可否については保護者の通勤や送迎の状況等を加味しながら送迎保育ステーションを委託されている事業者が決定するということであった。

A 市の送迎保育ステーションでは 朝（登園）もしくは夕方（降園）のどちらかだけの利用も可能であり、利用料は 1 日 100 円、1 か月最大 2000 円である。利用料の金額設定については、市内のバス料金を参考にしたとのことである。週に一度（送迎時どちらかで構わない）は保護者が日中保育を受けている保育園に出向いて、保育士と出会うということをことになっており、送迎保育ステーションに頼りっぱなしではないということであった。

これらのことより、送迎保育ステーション事業については、待機児童の解消や保護者の送迎の負担など、保護者のニーズについては大きく貢献している。

一方で、送迎保育ステーションを利用する場合は、保育者が保護者の様子を知ったり、保護者から直接子どもの様子を聞き取ることができる登降園時のインフォーマルな子育て支援について、不足を補うコミュニケーション方法はないかなどの模索が必要ではないかと感じる。また、現在は送迎保育ステーションを利用する保護者は、事業者が決めたルール（週に一度、送迎時どちらかで構わないが、保護者が日中保育を受けている保育園に出向いて、保育士と出会うということ）

に沿って送迎保育ステーションを利用しているということであるが、ルールに従うことができない保護者が出てきたときの対応なども考えておかなければならないのではないだろうか。

（４）まとめ

通常保育時間内において、玄関ホールや門の辺りでの受け渡しについては、保育室内にいる子どもの保育について手薄になるか、もしくは担任と保護者のコミュニケーションが図りにくい環境にあるのではないかということも考えられる。

お返しする場面では「保護者と保育士が話し込むのを避けるため」というのも 5 園あり、保護者対応が保育士業務の負担になっているということも十分考えられるが、保護者と保育士が連携を図ることができる環境にあるのかという疑問が起こってきた。

送迎時間の短縮を保育所全体で考えたり、保育士一人一人が必要なことを手短にかつ十分に伝えることができる方法を身につけることも視野に入れていかなければならないのかもしれないということが分かった。

アンケート結果の連絡方法より、日中の子どもの保育中の様子を、受け渡し保育士が保護者に伝えることができているのかという疑問も残っている。早朝・延長保育時には、保育士の勤務時間も考えると、必ず保護者と会話できるとも限らないが、通常保育時間帯については、保護者と保育者がインフォーマルな子育て支援ができる貴重な時間であることには違いない。

保育士や保育所は子育てについてのプロであるという認識を持っている保育士や保育所が大半である中、子どもを預かることや保育の内容や方法にのみ保育であるととらえているのではないかと思える保育所があるのも現実としてある。それはごく一部であるとはいえ、保育所は子育て支援の重要な役

割を担っているため、全ての子どもに関わる
保育所がその認識を持ってもらいたいと願
っている。

(5) 今後の課題

子どもの受け渡しが「玄関ホール」「門の
あたり」と回答した保育所が、受け取る場所
をそこにしている理由について何なのかを
探らなければならない。

「保育に欠ける」子どもが通う保育所は、
保護者主体の保育施設ではなく、あくまでも
子どもの成長を保護者と保育者が共に喜び
合えるような保育施設としてあり続けなけ
ればならないと考える。

(6) 参考・引用文献

- ・鈴木敏彦、横川剛毅：保育士の業務実践に
おけるソーシャルワーク機能に関する基礎
研究-保育所保育士の保護者支援を中心に-、
和泉短期大学研究紀要、第30号、1-15、2009.
- ・住田正樹・山瀬範子・片桐真弓：保護者の
保育ニーズに関する研究、放送大学研究年報、
第30号、25-30、2012.
- ・成田朋子：保護者対応に求められる保育
者のコミュニケーション力、名古屋柳城短期
大学研究紀要、第34号、65-76、2012.
- ・奈良裕美子：幼稚園における子育て支援～
幼稚園と家庭との連携のあり方について～、
東北女子大学・東北女子短期大学紀要、50、
113-118、2011.
- ・流山市：送迎保育ステーション事業資料よ
り、流山市こども家庭部保育課より入手資料、
2014年8月15日現在資料

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

松尾寛子(2014)「園児と保護者に対する子
育て支援を見越した関係構築のあり方につ

いての基礎的研究～保育所等における登降
園時の子どもの預かり方と返し方について
～」神戸常盤大学紀要第7号

松尾寛子(2015)「子育て支援を見越した保
育所における保護者との連携方法について

H県における保育所の送迎方法についての
調査とある市における送迎保育ステーショ
ン事業について」神戸常盤大学紀要第8号

〔学会発表〕(計3件)

松尾寛子(2014)保育所等における送迎時の
受け渡しについての実態調査、日本保育学会
第67回大会 ポスター発表

松尾寛子(2014)保育所送迎時のインフォー
マルな子育て支援の実態調査、第3回神戸常
盤学術フォーラム、口頭発表

松尾寛子(2013)登降園時の子どもの受け渡
し方法についての基礎的研究 日本保育学
会第66回大会 ポスター発表

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)
なし

取得状況(計0件)
なし

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者 松尾寛子
(神戸常盤大学)

研究者番号：60441391

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし